

【編集後記】

『部落解放研究』第13号をお届けします。これまで編集を中心的に担ってきた青木秀男氏が在外研究でフィリピンに滞在中のため、今号の編集作業を任されることになりました。研究誌の編集に携わるのは久しぶりですが、執筆者や岡山県農協印刷の方々のご協力を得て、無事刊行に至ることができました。この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。

秋光論文は、文部科学省による是正指導の実態をその背景とともに詳細に描き出し、今後取り組むべき課題を教育現場から提起しています。野世論文は、15年戦争下における中国仏教徒の呼びかけと日本の仏教教団からの応答について、数多くの資料を用いて明らかにした力作です。これら2本の論文は、県内在住の執筆者による地道な研究活動によって生み出されたものであり、広島から全国に向けた発信になったと思います。

秋風論文と妻木論文は県外の新進気鋭の研究者による寄稿です。前者は、これまで見過ごされがちであった軽度障害者と言われる人々を取り上げ、障害者を「序列化」する言説に対して一石を投じた論文です。後者は、被差別部落の若者を対象とした「大阪フリーター調査」から、社会的不平等や貧困が再生産される状況を丹念に描いています。いずれの論文も、差別問題に取り組む広島の読者に対して強いインパクトを与え得るものだと思います。

高畑論文と伊藤論文は、県外から広島に移り住んだ執筆者が新たな視点からフィールドワークを通じて生み出したものです。在日フィリピン人研究の第一人者である高畑氏は、国内の他地域との比較を行いつつ、広島でのフィリピンコミュニティの分析を試みています。映像制作に携わる伊藤氏は、地下壕の建設に従事した朝鮮人労働者の貴重な証言を今回論文として報告しました。両者とも今後さらなる研究の進展が期待されます。

以上、今号はいずれも読み応えのある論文が揃いました。本誌が広島県内外の研究活動に対する問題提起となることを願ってやみません。

(1)